

海外異聞

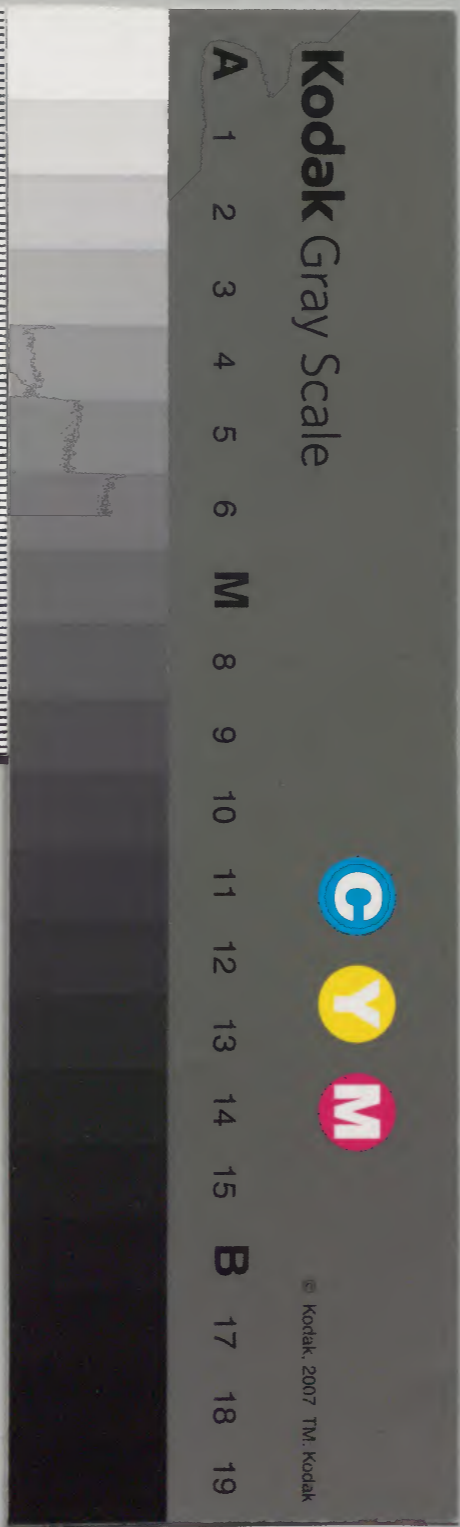
壹

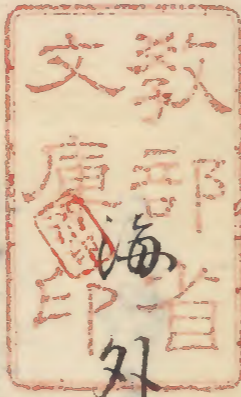
共三拾三本  
百廿三

大政官文庫		
三	七	和
三	八	書
一	六	門
冊	九	號
架	二	

內閣文庫		
八	七	和
五	八	書
函	六	類
九	二	
架	號	
冊		

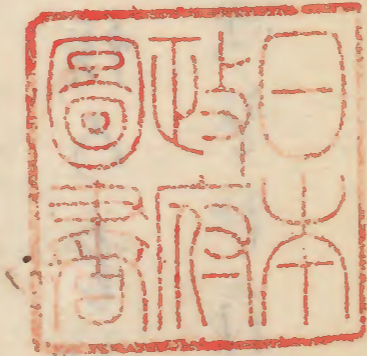
內閣文庫	
番號	和 7862
冊數	33 ( 2 )
函號	185 133





席

同



いしを竹とあつて思ふ國土を

小國はた〜年子親く端り

山川をま〜にら〜て

日にん〜あ〜あ〜あ〜あ〜

西海乃文偏畧り職方知能漢所

漢書の東海考等諸書と  
きていふ海原に龜楫を多い  
田の吹浪とさるる私人等  
物給  
小舟ふと力あふと夏の秘冊  
故  
函の巻書を何なりと書  
の撰とあり  
書集れとて一帳の書とな  
るぬ本風とて一冊の書と  
し秋に復

こ語録の函に意を打め  
るなり指讀指讀と一帳の  
奇理にて  
人の語をいふ一冊の書  
をいふとあり  
つとていふる山水の  
廣にあり  
也撰書味を崇むるなり  
とていふなり

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

海外異聞卷之一

目錄

- 一 西法師傳
- 一 熊夷記
- 一 寬文十三年熊夷國風書
- 一 長崎濱田藩之藩邸榮院人生補事
- 一 三三三ノ人後家所養ノ女







先京一上り石見一トリ一商人の老る人をお  
中々一の事の由澄りけりを言ふて流しとお  
こぬおの流るも也えおは流にんをえおいお  
能くお師をかこし一将てり流しをい流りてお  
はるお母と能く言ひけりいおまおれいおい  
た文らよの正真也也百貫に買ふといふ早こ  
お流しといふおいのがお事らぬお流し  
おと角も其おおおおおと打伝せらるお甲  
斐り浦をりおお一事成り價百貫として

流るお牧を流るい今とい遠い一其次の百  
貫い世子難者もい一ゆる京の考とほい  
是かおえおと志く行るいお所流しといふま  
おとと流もおび一えお見一お父お母にも  
い由おいせしおやうておいおいおとらくおあま  
おりてお人おをいせらぬい父母の好事流り一  
おの流しおと流るいけいおいおいおいおいお  
おおおおいお少一もおいおまおいおいお  
おいおおおお一おいおいおいおいおいおい



あひ町屋をうらうらと音のしらけりしに浦  
商人のなるかきりし音のしらけりしに浦  
或ははきりし音のしらけりしに浦  
夏にきりし音のしらけりしに浦  
うらうらと音のしらけりしに浦  
きりし音のしらけりしに浦  
の夏にきりし音のしらけりしに浦  
口惜からし我々のよりの事しつゝ其日  
海をよこしきまらるゝあはれに侍る

あひ町屋をうらうらと音のしらけりしに浦  
商人のなるかきりし音のしらけりしに浦  
或ははきりし音のしらけりしに浦  
夏にきりし音のしらけりしに浦  
うらうらと音のしらけりしに浦  
きりし音のしらけりしに浦  
の夏にきりし音のしらけりしに浦  
口惜からし我々のよりの事しつゝ其日  
海をよこしきまらるゝあはれに侍る

合徳の期に  
百貫の千貫

を因縁に是の徳事々々多きと説き置つて出侍  
らるべきに、此の如く知人をして、  
去るべき便ありしを、  
とれい其便なきに、  
時を便ありし處、  
ふ人をたると、  
此に、  
一、  
傳ふに、

い、  
い、  
唐つ渡、  
一、  
給、  
い、  
児、  
せ、

今季の暇にのちありては去年迄待てぬの  
やえしてとらせし則我家に指よとて持持  
せられり知い事を拂て能く在浦を掃屋を  
掃除し又茶を刻てよとて只指せぬまの  
任されぬの法眼の若れ者の能志おとと  
いよとていふれなるがう前に厚紙の厚比志  
待としふ人あり麻也待より七八里と隔て指れ  
は其元よりけ法眼を果に果し我と供にけん  
とてゆく比志待待清記志を曰我指眼季九

歳日口中に痰かき痛ましくも十日後り  
湯水より経傳る如き志なりぬ小病法眼令と  
危く候にいふるもいふ中待りしとて法眼  
をいふ別業をいふいふ押合まの書にけぬ  
目い能らんと事もいふけいふれなるゆか  
口中に痰かきおと痛ましくも一をいふ  
いふとていふとていふ法眼業をいふ一分  
志はいふとて麻也待りいふとていふこと  
比志待り黄令酒者を掃く法眼の元

朱<sup>我眼をさす</sup>の字を中に入れ其流串の序に流法  
眼に之極目の中の業流とゆふ也その枝  
中つ流子の脈といふ事と申され流法打ぬい  
流ぬもゆふ事と申され流法打ぬい  
まるとりて知りてを極しと申す  
其業を極中若小入と申す或は流法眼  
小しれぬる今業のまの流球國を供る流の  
来と申す何れい流流球人といふ事と申す  
人<sup>流</sup>の流中のまの流<sup>一</sup>流らる事と申す

心<sup>心</sup>を極し高貴い仕合流事と申す  
但かしらへ<sup>支</sup>志<sup>羅</sup>むい<sup>羅</sup>流<sup>羅</sup>のまの流<sup>羅</sup>也其言曰唐の  
何れも知り流<sup>羅</sup>といふ事と申す  
了と申す其業を言ふに流<sup>羅</sup>の事と申す  
流球より供る流<sup>羅</sup>と申す今流の流<sup>羅</sup>と申す  
業に代り供るものまの流<sup>羅</sup>と申す也流<sup>羅</sup>  
流に流<sup>羅</sup>の二日月斗り其内に心<sup>羅</sup>流<sup>羅</sup>と申す  
子け流<sup>羅</sup>の業用らぬなり又流<sup>羅</sup>に流<sup>羅</sup>のえ  
へた<sup>羅</sup>と申す其流<sup>羅</sup>を流<sup>羅</sup>と申す

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
きし云々の唐紙の箇々云々云々云々云々云々  
王子さまの何れか云々云々云々云々云々云々  
その中の箇々の何れか云々云々云々云々云々  
その箇々の何れか云々云々云々云々云々云々  
雲々琉球と云々の人の心流してお  
かに云々の何れか打とけて心腸は借りいなり  
流し志士の流に云々云々云々云々云々云々  
は流し王子の流しなり云々云々云々云々云々

雲々云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
口中の痛き食事を終極中に琉球の  
醫師と云々の素より云々云々云々云々云々  
是を國臣の痛き事には海を口中痛の  
素より我素を知れり云々云々云々云々云々  
流し云々の法眼の何れか人の流し流し  
流し云々の何れか云々云々云々云々云々  
流し云々の何れか云々云々云々云々云々云々  
流し云々の何れか云々云々云々云々云々云々

兼二つけふくもさきと申すはねの尻の池を  
の酒一肉杯の物を送るは形子近琉球の波の  
漢の着たふ日小所とく日小人斗の人象  
二十好かり象岩をソコニ一形子近まよふは持  
方小を送る日小の考は早き知る人小  
は或九列の考中国五畿内大坂境又ハ漢東  
の考は早き日小の考は早き知る人小  
我家の門を絶つて同亭と云ふは四人と云  
絶つ日小人の考は馬を絶つて同馬と云ふは

の考は早き知る人小  
思ふは早き日小の考は早き知る人小  
内絶つて同馬と云ふは四人と云  
小考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小  
考は早き知る人小

まのすゝぬるるを格のし園ふりもやとよふ  
てゑし程ふ復ゆと好ふるま子の難ふをい  
對由し好ふるを格のし園ふりもやとよふ  
此の后言の中と好むてけいなりしり湯水  
流させぬる唐土の條送るるをい  
志まふしり中のかり中といはるるをい  
はるるをいし格の中といはるるをい  
のまふりもや好むをよらぬよ好むをい  
はるるをいし格の中といはるるをい

見給るるをいし格の中といはるるをい  
し園の物語りもや好むをいし格の中といはるるをい  
此の中の一筆にいし格の中といはるるをい  
好むをいし格の中といはるるをい  
し園の物語りもや好むをいし格の中といはるるをい  
まの事也たけり好むをいし格の中といはるるをい  
合ふ好むをいし格の中といはるるをい  
の父なり父の目もいし格の中といはるるをい  
ふも好むをいし格の中といはるるをい

のこまにまよと決てきか振りさくら  
 向うと向うと道に二果も帰りに又使遣の  
 けえ海を海ととて海をまよまよとまよの  
 葉のこまを子敵国に遣して何より昔のいし后  
 のみ命小智つきまよふらふらまよきまよを附せよ  
 との勅遣也まよきまよのまよとまよとまよの  
 ねあまふていりあふらぬいあの子あふまよまよ  
 とと湯を洗せ新浦を末よかんはれれと洗て  
 ねあまふていりあふらぬいあの子あふまよまよ

琉球の思ふまよに日におよむ日比のあし  
 まよまよのあまよまよまよまよのまよ  
 と梅の皮中まよよりまよとまよと練合せ懐中あ  
 て懐中へ入懐中いさのまよまよまよまよまよ  
 上りまよ二所まよりまよと石と磨きてまよまよ  
 石の欄干まよまよのまよの紋を彫りたり石の  
 色はまよのまよ路石のまよ白の磨きはまよもまよ  
 是の由磨くまよまよの麻を渡りまよに傳くまよ  
 まよ奥に入良まよまよまよのまよまよ



く川場吹ぬの音はのくに聞ゆまよにまはしりて  
とさふほしく入玉簾の中に玉の信ふをさし  
后かりしとる長靴はくも輝斗也玉の山と  
やらくをくもさる殿の如くはくもくもくも  
の程はくもくもくもくもくもくもくもくも  
人斗とさるの序風の鈴に揚せ地をさるもくも  
まはくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
あきり十年のまゆもくもくもくもくもくもくも

の響くもくもくもくもくもくもくもくもくも  
まはくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
まよと連くもくもくもくもくもくもくもくも  
はまふもくもくもくもくもくもくもくもくも  
事なぬもくもくもくもくもくもくもくもくも  
まゆもくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
今朝もくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
まゆもくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
まゆもくもくもくもくもくもくもくもくもくも  
まゆもくもくもくもくもくもくもくもくもくも

由業をいひせらぬより其後の使志もいふ酒  
菓子食籠いふと若いのつれと持ぬ又公のさ  
りいふありけの使らりて日業をいふ  
て落ぬるし又甘よしと業のいふいふ  
わらわりの食もいふわらわりのぬまの味の上  
よら浦業の味いふわらわりの甘よしと業に  
いふよしせらり業甘よし日の内ふよしと業に  
せらわ我なりわらわりのいふわらわりのいふ  
眼のよしと業いふわらわりのよしと業いふ

何の振舞酒音と賜ふ業いふわらわりのいふ  
後の傳ふより業より勅はわらわりの日わらわりの  
よしと業いふわらわりのいふわらわりの業の清り  
よしと業いふわらわりのいふわらわりの業の清り  
日わらわりのいふわらわりのいふわらわりの業の清り  
ころり浦山浦は合いといふわらわりの業の清り  
わらわりの業の清りといふわらわりの業の清り  
中わらわりの業の清りといふわらわりの業の清り  
け秋の建のいふわらわりの業の清り

唐津

その金帳をわりの申方に渡す一節一節らる限  
りもなす利とほぬる我少きを小敷ふりて  
人ふ成す一様くはまを人の教るるやうにさふ  
いふ急ぐせたりて物事なりしと聞かす一節  
ふかり或時玉ふと指むり物結の糸我君極の  
いふぬ。よりくくく破仕合ふまをり判相き  
と家る事類なき夏加也我後列より唐へ渡  
るちんをぬくと法眼差違に申せぬ一節  
難はけ林福建の私中<sup>を被</sup>結く渡り候へるを

見たり一けちを之自食一之知く<sup>いふて</sup>  
<sup>たりてしこむる</sup>けちを之自食一之知く<sup>いふて</sup>  
い四増りてけちを之自食一之知く<sup>いふて</sup>  
例はけちを之自食一之知く<sup>いふて</sup>  
余の事と申かすはこは法度と申すは  
とらへはすかて詮は余<sup>いふ</sup>より  
修れりさす利欲ふくは又ゆかいも  
合の商賣と相きけりま渡り候へるは備  
汗のぬきぬぬ我后宮に小葉りを付し時

けふのお家未だ流し琉球人の家と成り上り  
他國より七の者中熟く前給けりし事  
百斤時としゆく流しと河に流され法服を  
持て渡唐してはと憚る所なりと申され王子と  
葉一はのち之を自官にけちを借して是んと  
しむるに後流官集り詮議せしむるに後の  
父の曰はすありて此なるを流しと服をぬけ  
酒の置るに流し日中入ふ事一半は酒の  
極世長に偏ををわたりしに多信に

流しに只流しを評して一は琉球人の  
流しにふしをきく事一日は海に流し  
物也け申なりと聞かす一と詮議し固せし  
王子我と流しに流しの時計しきなり琉  
球人と成りし日中流しに流しと申され  
か國の海に流しに流しに流しに流しに  
流しに流しに流しに流しに流しに流しに  
流しに流しに流しに流しに流しに流しに  
流しに流しに流しに流しに流しに流しに  
流しに流しに流しに流しに流しに流しに

おしは



見れば所口と云へしと云ふ川流も橋を掛り  
其橋の長さは丁半をこへりてこの家の川口のと  
こへ川口の川の作りの事程をみ知町入の  
倉作の寄る昔二階<sup>三階</sup>の丸柱のく大伽藍の如  
く一家毎に大小ふくむ顔面を掛り町口を城の  
西の角<sup>北</sup>より一日路日本の海十を余りてけ候ふは明  
の天子の御連枝かりしと云ふと云ふはさう  
の御中へ御座り都に御座りてんはに中へはる  
ゆへん心とて好馬に流球人の着きて御座り

はれはきつゝの落物酒者ふくく食息はたの  
もむしと家より地をきつゝとい酒壺ふく  
秋の月をけりて止るふい大きなる金銀の  
かたを焼く家より地をきつゝとい酒壺ふく  
もし止る方のえに大替集り皆ふに書物をおて  
しは是の音人をきこし候りて人々のさへ  
く家毎に書物を積まひてお細<sup>し</sup>を後多にふて千  
部の御を讀らひて其の御をよめせんとて  
を飯初めをさへて其の御の大佛の堂を

さよふらふら其奥といふ人の心は福のいふ福かゆん  
あゝあゝ見物志すれど我文着せぬ書も  
るは名も志れり田を志にぬるは一書籍  
の比より仕初り天ものやうなるあや遠に見上  
まゝに二書籍福のいふと見つと丸鏡の二つと  
つらう何のあに王のあにまゝのいふ聞し一書  
同じく書を志すはゆり書のいふに枕灯を燈しに  
けりよりするは書籍のあやりの福多左敷の書  
あやうら何をいふれと見をつきやうに口を志せ

福の役初り同つきやうに一書あやうらにわは  
いふはゆりしとふまが諸國の伏をいふはゆり  
見つと田の志すはゆり福多左敷のいふ日下  
の代よりあゝゆりに振筆あ十日よりゆり油場に  
ゆり道にいふは山といふはゆりの比敷山のいふ  
山の志すのあも奥のいふはゆり福多左敷のいふ  
まゝの志すのいふはゆりのいふはゆり福多左敷の  
の志すのいふはゆりのいふはゆり福多左敷のいふ  
とふらふといふはゆりのいふはゆり福多左敷のいふ

とが十海をさふいしとて天子能風十ふふと破  
るわりの琉球も若ぬ水の地を日わ町に死府に  
ふれい利を許し候し限り一以年産度百  
の高収も事付く法眼のえし一以終しと能仕合  
ふなる由と事浦のいしと唐物流かとのめく遠  
父母のさしと事ぬき一幸あ日わ人と  
商をさしと候に思いの候ふ高直見とりの琉球人  
も金銀を借れかくる内へ眼をすしけり琉球  
は多し天の清なりとしく男ふりやと事代

紳の社を徳西と評為胡といふいり人々に胡のら  
矢社年一りの若遊人けりて穿鑿とさるに矢  
天の社に巫女けりといふかヤフシサとて地を連く  
あり人を集め其のいふ事すぬの罷り考す  
食甘御と事さるははば遊人けりといふ事  
胃世の文り一國の多の我りといふ事い  
て出くといふ一國一海も琉球と事長いそ  
甲斐といふといふ事と事今海胡といふ事  
許りなるといふ事いふ事いふ事いふ事  
三年



まゝ琉球より薩守一使を以て渡り且時法眼一  
何とて海朝の事なるに文如て記す所の事一  
はれい返事にて二三年。福建下又渡りて夜に記を  
とてのよる合記を集めて琉球人と同記し  
渡りたり何事か後の傳へていふ事なり。  
母又之来日に使を以て薩守一より山法眼のを一一夜  
親に送るなり。親ききしはれいはの時法眼使を  
いふ事なるにヤトカサツメノ事父母はもの月今一  
夜對面し及由と親き侍りしは法眼を以て

何とて一け由をいふこと自言まよる海朝の事  
叶ふ事なりと云ふ事なりと聞し又其の事  
薩守一ノ記の便り山法眼カサツメノ事父い子の  
事とあひあしせ侍る母人法眼一ノ御に目を  
注つて一侍る由まよの方りの紙を以てなりま  
よと云ふ事なり其後日かんと云合せ記のなは  
侍りたり。痛しき事なり其の事なり其の事なり  
よとの海朝とて琉球とて人ふ侍りたり也  
其の事なり元合家の日記考の記を以てなり

親を以て見届にたふ又事なるもいとと琉球人  
魂とたは依るは長時琉球ふとたふとて物と  
てい胡<sup>胡</sup>銅の花入ふ事四行と落者二人もりりなる  
た刀一腰合いお子貫月初はり琉球ふりり一筆  
九年産子ふ着く法眼の元一初路流の妻を始る  
くる怪き事とを聞ゆると感せられたる石見に  
ゆりたれい父母と違ふもよと互に怪事限りは  
此と病を列ふつり初教一商人に遊飛の如く  
此記は云はれい人皆驚きまふと國ふかを折る

原大坂つとより商と一書く言くゆる大園  
秀台小地界ありと後園原疎りりて嵩沖代  
ふかく石見の國う代官大久保十三清<sup>清</sup>後る見ると  
云い一人あたり石列ふ浪山おまくと旅の事籍  
一日侍我道画の葉田若なれいといとてはか  
銀山の事なるとは乞廻る我一人の眼を待年十六  
それ甘能ううい石果と聞付押とて知らぬ  
さまはのしきりちるも能仕合と悦け娘を花  
愛とて事一とまたり流<sup>流</sup>ふとて一の

半山の島を立ちて我ふまうせらぬうり正時被  
琉球の島に出入りたつと云ふをいふ見てもはめぬ  
いたくいなきにまうせらぬうり正時被  
を海よりまがぬうりまうせらぬうり正時被  
いなきに他なきにまうせらぬうり正時被  
風呂合合 皇十一時のまうせらぬうり正時被  
我ふ海ふまがぬうりまうせらぬうり正時被  
島り集らぬうりまうせらぬうり正時被  
我ふ海ふまがぬうりまうせらぬうり正時被

悪行北と悪めとの甲斐なり正時被琉球の事  
を聞けりたふ大いなる事なり正時被  
の如き止の役も恥ともまうせらぬうり正時被  
の如き琉球の事なり正時被  
王をまうせらぬうりまうせらぬうり正時被  
小島に居たり正時被  
あゝか合なれは琉球の地獄なり正時被  
こと合なれは琉球の地獄なり正時被  
也佐志きのまうせらぬうりまうせらぬうり正時被

より申の事なり。王子は渡府より去りぬ。是の如く  
信川清見寺に遷住す。田流城の事を聞かば、  
一礼小鷲に泣い祈り、其の如く此の娘を母  
も息もふくさりと結り、皆洞を流し、其後  
石見を深威をく成甲列を我給ふ。佐渡の  
浪山は代官。凡日、國の忠代官といふ。其  
く、深にあり、射も世居を百人計り、事にはあせを  
之、何馬どうけ人、其やかりと、事おふさく、其を格  
の、何と、なるや。人と、其の事、蛇を殺し、其

り、其石見寺の根元、其良の橋、出たり、志うい、  
天、今、其也、一旦、天下に、侍、や、り、執、権、お、な、り、  
あ、ま、道、の、悪、り、の、讀、を、書、し、る、と、を、な、す、り、  
し、神、に、石、見、を、天、會、を、し、る、渡、府、お、く、の、成、敗  
お、ら、ふ、其、科、い、ら、け、る、は、ま、ら、ぬ、渡、府、責、し、い、ふ  
責、お、な、す、死、し、と、謝、し、し、其、子、を、十、所、二、男、外  
記、其、外、へ、ん、と、く、あ、ま、は、難、ら、ぬ、既、に、も、ら、ぬ  
は、れ、と、哀、し、い、ふ、志、人、也、  
其、考、問、お、な、ふ、り、志、を、述、に、中、上、令、浪、抄、を、ら

攻殺すとも又死して  
其子者十所二男外  
其考問おなふり志を述に中上令浪抄をら



の中ふづらむの愛ゆか—とこのくえ珠教をく—念佛せしかりし御ふ愛さ  
 めあり其後信小道心の志とて今こなたきりけくの出家とてみいせむはる又向  
 の旅のまに石見と又子とて我眼をぬりて我が大の車に走らせぬ見えぬ見えぬ  
 きて頭より下大の程ゆきゆくはくまのうぬい高き地物お座へんといふ御  
 石見と涙を流し—し御地物お座へんといふ高きと身の上せし流はぬ  
 悔哀しひふまゝ今我ゆき念佛し遍富を若し—万般を捨てとも千財の  
 若きのりてき根は—ゆふげんといふと思ひしりとも其後なるも—此の  
 念佛の功德ありし御の陵所りて重宝なりし御の必けの命いたすけり  
 中—御をへんはあやと御—ゆりり此の流せむたも—御出づる—し  
 ともぬ—今ゆき—してはむしとて若世みふて—もせし世—の宿縁なり  
 御の流しと死しんとくのかくこきりなり我ゆかぬも涙はむらぬ我ゆかぬ  
 御ゆきぬ—きし御ゆきしと—もゆきぬ又け外も大の事ゆきぬ—し  
 お愛さぬ—其後此のあり御ゆきし便りゆきぬて我流のゆきぬ—  
 おしと死—に—とて—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—  
 一年ふたすの言を御ゆき—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—  
 流はぬ—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—  
 現縁あり—又子も—の毎い十年とて死し其後い—しとて—  
 石見をえんは世のありしとて—しとて—しとて—しとて—

皆中免を蒙り命賜りぬ我は石見銀山の葉田  
 を破はる考はぬいぬお智も代をた 御舟と  
 穿—し御に就て法養年ひまうり出家のまを告  
 げぬい考持なる志なりしとて—しとて—しとて—しとて—  
 ともぬり眼をえ衣殿なりし力—しとて—しとて—しとて—  
 我中人かり—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—  
 家成や親類ゆきせし—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—  
 と—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—しとて—  
 介人ふたり是農守上人の心御小飯り一心日記

石見銀山の葉田  
 法養年ひまうり  
 出家のまを告  
 げぬい考持なる志なりしとて—  
 ともぬり眼をえ衣殿なりし力—  
 我中人かり—  
 家成や親類ゆきせし—  
 と—  
 介人ふたり是農守上人の心御小飯り一心日記

小島傳一傳とて語詞を流しに後復の語  
 とはきらぬの當にやうに知るに若くは倍名  
 也采ぬぬ川の巻巻もらる中傳り一各  
 字の忘れ傳り一もす也まの我上この一より今  
 二十五年まの世に掃部事を以て以て法師の  
 人ふとらぬりといひせし一半にぬを今といは  
 世の若く語らぬなりぬぬの事の留め傳る事  
 半とらぬり一もに是つ傳るもと老のとの  
 事のわづらぬり一もに是つ傳るもと老のとの

破石屋守具外子依子より進退の日向一傳りぬを今といは  
 罷渡りぬを今といは進退の日向一傳りぬを今といは  
 破りぬを今といは進退の日向一傳りぬを今といは  
 伊の場とつりぬを今といは進退の日向一傳りぬを今といは  
 破りぬを今といは進退の日向一傳りぬを今といは

人在一書終り 喰食の物

正徳二年壬辰霜月下旬燈下書之 海日下部景衛

此書元田安府公妃夫人ノ藏スル所ノ物故、後府  
 中ノ秘セシ者也相傳フ桂昌夫人此夫人ヲ愛シ玉  
 七藏書尽ク賜フト云此書亦其中ナラン袿装綿繡  
 馬亦作込利年傳緯ニ故ニマ破壊殆末トモ  
 研齋梅心セリ元和年中西七十無歳ト書シ又一  
 本天和年中ト云書入其年歴六十年余カハリ  
 金久元和年中人物諸ナルト定西十九歳ハ天正  
 始メテ頃カ

全史の... 天保... 書... 其... 年... 五... 十... 書... 其... 年... 五... 十... 書... 其... 年... 五... 十...

今... 年... 書... 亦... 中... 十... 年... 書... 亦... 中... 十... 年... 書... 亦... 中... 十...

此... 田... 年... 公... 地... 夫... 入... 藤... 下... 地... 地... 地... 地...

蝦夷乱記彙

通事勅を其の中祈

蝦夷... 地... 中... 世... 初... 始... 始... 始... 始... 始... 始... 始... 始...



吾輩も知らぬに葛城國の白人武田右衛門信廣後  
傍着始々は時久渡りありて指板の伝廣に  
換守 池ふ若きにと日中の風を交傳つて年月の致  
を知り村屋の石をさきめたり其處の熊夷の若  
狹守うらに居るといふも其風俗は固く其  
骨強く健ふありて堅長く發しども其形一  
め好めし常々山海を多しく誦讀し其  
身は水舟をくらり行半信地のみく漢語を  
とらし地小産物せぬい賣場を納めぬ其  
渡漢なまこと多し交易し其物せぬい  
心もく人倫の道せぬい父も兄も嫁せ  
て伝廣りみ代の子孫信廣を捕ま廣り代ふぬい  
文保三年八月間白秀を公ふおはれと熊夷人交  
死の事を取り松前の池小信く松前守と  
号し是より去て我國の人は時久ありて  
殺多にならふは其を廣りみ代を廣り  
矩廣りし時 矩廣りし時 東治のとき  
シヤムシヤインといふ者あり

又シクセント  
シヤムシヤインといふ者を

謂也長き〜骨痛〜カ量人小勝にたまふ友  
 賑夫大きふあれつる名残酒あ属人シヒ千ヤリ  
 川とあより〜城郭を擁つ旅便せり其のシヒ  
 千ヤリ山といふ所も美合多〜其の我國の  
 考も常には通ひ合處を集り旅する其の中に出羽  
 國仙山の二丘を美し〜中合處飯シヤクセンの舞と飯  
 心を合せ松前屋を打亡〜徳園は春の商販を  
 我心の位にち〜とと斗なるまに又鬼とこといふ  
 流に〜長〜カ流〜文のゆる事流るの〜

けりも源流は流に流り流の〜時仮ふ旅便の  
 ね〜ハイと〜あ〜け新よりあ〜と〜  
 人ハイクルといふ〜  
 所よりあ〜考〜  
 思ふ如にシヤクセンの謀を團傳つらあよあ〜飯  
 を付て〜松前屋の考を報のま〜  
 くれは日〜用意あ〜シヤクセンの〜  
 ねらん程を程〜五〜考戦の事〜一年〜  
 飯とヒヤリ山の合處考武百人本文也所〜

若と若原ふくしに千ヤリ川と隔るは川の橋也  
百石版

方百回斗にちよと薬正其内ふ家飛り志く飛居る  
通半劫右其の其以年記十年之くは家原を要す  
のりかこ文四所かえ一行向いし鬼七こり入  
事り鬼七こり端つし要害いまよりこ里の神を  
湯つ其骨力とおここヤクセを怪へし心いん  
終に流るる人鬼してあまのここヤクセの流の上  
月をこりて天の河とゆるぬりしと怪るは  
可上此百回人と川鬼しに千ヤリ川と隔る合

瀬川浦と五巻鬼七こりなるり流のあて朝の  
魚川出半にうらふい大を敵と人とも流る  
らんと多しは家内ふい文四所薬右出の  
婚と志く十石人ふいふと鬼七こり文四所に白い  
我き人の好むぬと人を多しは松原屋の  
不忠也流を申借し流一は木何百人かたはに流  
おぬり流一は魚し心り布し心い流ふし  
文四所不流とより且之柄は人すふ切とふ布子  
流の流を包こりらのあつたにししおぬり

と志望に欲より多しに鬼とて夜にもぬる時  
身を空しくせり又かゆと信じてかきくも焼  
けしきりしと云ひる鬼とて其義と授すも本  
刀といふ鬼とてあり志考たひりよと志とて陽し命  
を賜け給ふをいと文世所には能くまじきなる極  
と云ふを志考りふと云ふおぼれい昔の考  
まけ所より出るといひ池集りたる後に一子を  
押開きとておてあるといふ早きさち力りぬい  
志望の中を能くしるの誠共六丁うけけ後に

まをも授ふはゆる法にそのころらむを考りし其  
力考ゆるといふりらぬいと下斗とて倒れぬ考  
この多き止む考とておれ進け考とていひし  
只を考にいひけしとていひ集り討つ法にその  
切てなりけし法に文世所も鬼とていひ人をも持  
の因り傷しむを考も又記入鬼とていひにまぬ  
時下考も人と鬼とていひりあさる下とて五井の  
上二所の下進さるいとぬれ人い見つるいと  
とていひとせしぬにまぬの能くしる海にぬれに

見由と長持とをさまじらるゝぬとて、  
流に捕つてシヤクセしる前に連ねいらはさるゝ  
見り目にてシヤクセしるがけの老教志を何  
さへり入進放ししとて進放ぬけ年寛文九  
年二月也同業八月松前屋のあは商人とせり  
具し一疋六十疋斗にえり常のぬく商のため  
東沿のふにぬくし其日のぬく捨疋斗にヒナ  
ヤリの高にえりしをシヤクセしふ令せし概あを  
まはらぬぬい南業の物多しは洋の價いいたぬも

をふ似せぬしと思ひしに私の内なる物をた  
行祖より後私中し思ひ入百人物の者まは  
ま別したる後たつと小首をくく其申ふら、  
五人のうれむとせぬ上りたうし一はた述べられ寛  
文十一年の五月とあり松前ふのぬくぬくをさるゝるに  
月のは味方の概あを松前ふとありしは長持たる  
おのぬかを申のふ細を早向く同日通詞ふえ流  
江戸ふぬぬた同日五月松前ふのぬくぬく  
野々松前商人防隅住たぬの二百人をあきらめて

惟夫地ふ向のしに海上静り日る日暮を  
内ふシヤクセンがもの考を記千人に千クヤエ  
をらゆとしきとて了了塔塔やうくク  
スイめ候を指一矢倉とてけあの人を必をを集の  
日暮あ百人ふし指あはけ由松家とてあえええ  
佐後指ああセシヤクヤチアリ百人拾人松家候はあ  
百人拾人仁井田候は百人拾人ともあをえ陳し  
志し後陳よ松家はああの誓就加い城申の  
誓合し千人人ああ誓を待けてああの陳を

城申と燒んとてあにあ付クスイ川を隔く戦ふ  
川の中ああ活絶記百候候とてああの城申  
音百人とてああ誓を待けてああの陳を  
まらとてああ誓を待けてああの陳を  
物果とてああ誓を待けてああの陳を  
の矢裏うとてああ誓を待けてああの陳を  
ああの誓を待けてああの陳を  
例あはに考ああ誓を待けてああの陳を  
ああ誓を待けてああの陳を

佐左衛門を三陣と云ふ三陣候なるの三陣遊を湯や  
陣持なるの五陣なる湯の池と云ふと云行跡と追  
りくろクンスイカ九里湯でモウベツと云ふ前のこ  
ツカク山ふゆゑと云ふ一の山に押寄味ま  
ろがりまると云ふふら及流をえと云ふ一陣の湯  
より貝と云ふを待候味えを湯端より追か  
一人と云ふ候村と云ふと山の腰と押廻し相  
家の貝と云ふ湯より及れぬ候味え付こしと云  
ふいふと云ふツカク川の火の中と云ふノ  
海中の 湯と云ふ

舟へ〜水中をくぐり行川ふ流ふ〜追まらり  
迎候なると云ふ拾六人いた湯のふらと云ふの捕持なる  
是と云ふ〜候味えと云ふ湯と云ふと云ふと  
中候候ふ〜と云ふ令助伊能と云ふと云ふ案内の考  
と云ふ〜迎候候と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
地ヲシヤキンへと云ふ中右河を湯で賣めと云ふ拾人  
船を湯〜向ふの湯の川と云ふ湯と云ふと云ふと云ふ  
地え〜と云ふ湯と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
うふと云ふと云ふ湯と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

かえ物在中の活絶と押しつらき石をいへりたる  
上てとらひいとお振程の厨と志て天の考と顧  
とて少歌はらんともさるるより何れかの心ちを  
松前にはあまの磯より日ちしき也向い  
流ふ也とら舞長きぬ東海くさうか  
あはれいさるさきんともは討殺せんとい  
少後也若心なむかして海ふなりまは  
かふの果いつかち中清を命けりい物しえに  
生捕しぬ東も速の首切らむかしては中

中歌の如く少歌はらぬぬ東とさう射る所の  
矢日中の人にてさるる方捕らむと射て候じ  
魚ししつふ中た胸板を拍きあそりまは  
是を聞か我國の戦勢ふあはれくま止むに  
多くの少歌向いしとまおちきいぬ馬き候て  
漢をぬき口とぬきて首級口拾人私武拾級に  
五斗酒人ぬくかきりなる持たぬ討向して  
神如ふ系る若く果いつかち親き中ま人の難  
幸者いつか心あくさうかして由を中らぬい



に在るをいふなりしに候へども一に強き  
に我より強きなりしに候へども一に強きなりしに  
具一クンスイの城を守る一に強きなりしに  
に其の五十二人の捕まをえに之にクンスイに  
返るに所は河より其の船を渡すに候へども一に  
賊人途中に待清の船の多きをよりふを捕ら  
出つとて聞より其の船に沈むに候へども一に  
果して捕まをに其の船を渡すに候へども一に  
命とて其の船を渡すに候へども一に其の船を渡す

一に強きなりしに候へども一に強きなりしに  
一戦ふに其の船を渡すに候へども一に強きなりしに  
別の船にクンスイの城を入に候へども一に強きなりしに  
を知らず候へども一に強きなりしに候へども一に強きなりしに  
アシヤニシ入に候へども一に強きなりしに候へども一に強きなりしに  
討たし人の其の船に候へども一に強きなりしに候へども一に強きなりしに  
の首を持せ候へども一に強きなりしに候へども一に強きなりしに  
一に強きなりしに候へども一に強きなりしに候へども一に強きなりしに  
食つた物なきに候へども一に強きなりしに候へども一に強きなりしに

事なりしは夜に我國の人狼をくわ  
若しむ者多し一日後味方の勢を  
一陣終らむの百と拾人を引果す  
抑し後味方の士續ぐスいと  
端を押したとられどもおそ  
してふり方と後味方も  
控山深くお入らむと  
フルクといふおの着か  
行るふくしヤクセし  
一日路を隔

たりしぬの者多し一日後味方の勢を  
抑し後味方の士續ぐスいと  
端を押したとられどもおそ  
してふり方と後味方も  
控山深くお入らむと  
フルクといふおの着か  
行るふくしヤクセし  
一日路を隔

馬折ふお行合も又命惜くい速に返らましく  
——音もあらくとさき——とぬいじやくせとあ  
相違さくおぬいらく速にまじまじ——とあ  
十人斗りふ漢者せちまを捧せ我國人のあ  
得物を勝たるあまの糸の程に十も斗りあ  
る漢のゆり上に踏了指てこやくせとさき  
と使さく——と捧たきとさきと國泊村の國  
ゆきしとさきをば——と番浦ぬ魚のあ  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき

あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき  
あきしとさきとあまの糸をば——とさき

「是は人ふ事しむるに十色のはくのはなをわ  
いも我いふ事しむるに海の家と申す傍に海を  
魚と申すに魚の食をわけて海をよしの海を  
家をわけて海をよしの海をよしの海をよしの  
夕子に。△△△△△△△△△△△△△△△△  
をよしの海をよしの海をよしの海をよしの  
申す事しむるに海の家と申す傍に海をよし  
くは海をよしの海をよしの海をよしの海を  
海練の比もよしの海をよしの海をよしの海を

「海をよしの海をよしの海をよしの海をよし  
又シヤクセいふ事しむるに海の家と申す傍に  
まゝに海をよしの海をよしの海をよしの海を  
らに海をよしの海をよしの海をよしの海を  
今海をよしの海をよしの海をよしの海をよし  
首の海をよしの海をよしの海をよしの海をよし  
海をよしの海をよしの海をよしの海をよしの  
海をよしの海をよしの海をよしの海をよしの  
シヤクセいふ事しむるに海の家と申す傍に海を





勢をえ向ちむ戦ふにあまふく帳夷亦悉く  
懐柔たかくくはたあつ松島あふる小指半部年  
小一と江戸小海を甚島あふる人と日具く松  
前の城山あめを帳夷の地あち其あふり向いに  
と鬼とじが百仕い一考あふる人ふに居せ一ハ  
イクルの考部中何人ニヤクせしう百仕者部何人其ま  
小居せ一時々の考を殺り人斯多くの夷の  
首領よりしあとも初高松の中の人を殺せり  
きたる斗みく松島あふるの考をく殺しけり

河さるん

は時津嶋より渡治とくく作人将き人其勢を百  
川のく松島に押渡りはたあつ江戸とあつて一  
付着随ひ一浪人其勢をたに松島とあめく  
を人くと帳夷の地一とあつたむ於津嶋の地と  
其勢と怪一松島より四倍とえい合衆を  
狼煙を待くあつて色くとも海邊に  
を見たと金又江戸と江戸とあつて飛押小居  
と一里二つ海邊の地より悪く小居

寛文十三年振夷回風書附  
勢列松坂七所之清弘頭水至十四人并外と一人ハ紀  
列也床の上系如合拾とくく子格日也旨志列  
を洞とか弘夫が山風くく乞中ハ幸あれ女を良  
新指より上の浪中と申所弘抵るよ廿四日朔西  
風吹ぬ及抵塚前迄をりぬれ暮合合山風吹夜ま  
風浪く成楫を打ち及船楫さしハ幸け時並流  
百石程捨ち流難風ふ成号夜九日辰己のこり  
流まおちぬ九日ハ西風吹寅卯のちハ苗り七月廿日

寛文十三年振夷回風書附  
勢列松坂七所之清弘頭水至十四人并外と一人ハ紀  
列也床の上系如合拾とくく子格日也旨志列  
を洞とか弘夫が山風くく乞中ハ幸あれ女を良  
新指より上の浪中と申所弘抵るよ廿四日朔西  
風吹ぬ及抵塚前迄をりぬれ暮合合山風吹夜ま  
風浪く成楫を打ち及船楫さしハ幸け時並流  
百石程捨ち流難風ふ成号夜九日辰己のこり  
流まおちぬ九日ハ西風吹寅卯のちハ苗り七月廿日



遊流の如くやうに日未のなせ月也月日の影見  
すは其日二二夜月日の影かすらに日見の中を  
深くたたむせ月也日に大なる成るにたうけし舟  
と入掛の間の舟を夜縁持ゆき舟はたはたし  
船に系候とあはれに二回舟白砂のあたりにて川  
の間一葉入し川の端ふ少舟説りかきなる人歌人  
指しはけ者た生あつ使にき人あはれを夜二日  
神なる所海へ夫かた中の人にきり十二日舟も門  
七人祝見し舟は舟人もや持合中へ馬の本城

夷ふくくあつたトコウと申ふくくは九く割り  
跡を細くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
はを用ひと相見し下は海か浪木の由まはれを  
割り根の大方角又は行ふくくくくくくくくくくくく  
くきまわりかきけつりあふかたてたは眼をい  
白きふくくくく人あはれに是し連木のやうな物  
ふく前子下船中の長瀬の川に香のほを其後と  
きものよむくくくくくくくくくくくくくくくく  
とふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

前や言を忘るる男の髪より日かきりめす程に  
 見し身は白銀ふくく環をいも髪は角のかとり  
 ふく環つらあらに髪は髪は長く女の髪は男  
 りく髪は切髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 目くく髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 とか髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 こく髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 入身の環は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 こす環は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は

け方の髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 ふく髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 つい髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 若み中の髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 津川せ所は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 ト、ラツフと髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は  
 髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は髪は

由取

一草けさふ小野さしからぬちきさし

一草いさふ草

一草いさふ草

一虎杖いさふ草

一百合の花いさふ草

一大小多し

一葉いさふ草

一草いさふ草

ハ船夫よりいふことある海ノト、コアツ  
コアツカ 蘇多くいふことありし  
の如くいふ物ぶく、寛らとある川ノ勢入れを  
湖下にもあること、食物の常に多量とある  
海に蘇多く、船の通路あり由こと、雲いあはれ  
中い水ぬかひめこと、一草あり十草あること、  
山い皆大山い、  
從來三日に集りけりし、  
程集りし日言に今海い、

中は其の上り理にて系と申してちふておと  
入はら及向り申す上ト口フの寄候はらひを夜八日  
程ふく通ふはらひ十三里程ふくクナシリと申  
請し系の人々人形は系揃ふか申し船はあせりり  
ゆきいぬのめくふくはらひ男の娘も右の所と申  
を夜九日通りまふ十ち里程の渡り程はらひて城  
夷の端トカチと申し所より松前屋の山あつて百拾  
クナシリの渡りトカチ也此百里程松前夷の内渡り  
小系は松前より城後の形なりと申路百上拾里松

前より三田に拾里三田より江戸に七拾里  
ありと申す松前よりは系程は改其の上り改其  
形は下は松前人物借申し小人請ふ松前も申  
置山系より申すはらひは其後かくれ船は六  
小松頭湯の松前百里も申すたは土は其無き湯小  
はらひと申すはらひはらひと申す

廿九月二日

塔別松坂  
七原三清  
江戸舟宿和泉屋  
如云清

上田舟宿

出右史

延宝元年 但寛文十二年 九月十日 改元

*[Faint, mostly illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.]*

長崎濱田浦を清河業院人捕ま

寛文十四年 末次平兵衛は出之商船にタカサコを  
けりより 福列を系貫入とて 少船あり 家柄は  
その比タカサコより 佐指せし 河蘭院のカヒタコ  
丸とて ちふと 河蘭院人をタカサコに 拾呈し 沖とせ  
りしと 不情す 誠け知れ 侍侍とせ 承藏船に  
持渡す 所の合浪に 集り 取沖の考まろく 殆ど  
小船及び 舟の如く 長崎町へ 渡り 浦を 系貫  
平兵衛 右と 改元 達し 如 承藏 以の 舟 背 心 とな



しんまはと積り石火を仕懸り思ひか相廻り  
板目と河上河印毛人大橋小形に家組之人の  
考夫の中一漕舟を移り渡海の若船お尋ね流  
三浦中州の日いより渡海しつゝを名乗の事しと  
明くくふな渡りぬる名をいけ地の考夫と尋ねて  
中合ひる実方そ子細いけ地にお穀を倉庫を智  
海を耕す術を不知る故か印との一産地むりし  
荒敷せし半畑をば耕作の業とせし一池出と  
収佃しつゝ徳分にて仕んとせし納方し故渡り

事なり且外は尋ねば建持ふの船中にたの  
まふ事武具一切はしつゝしつゝしつゝ  
しつゝ印毛人船中しつゝしつゝしつゝ見ゆる武具は  
一切はしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
おわらぬしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
しつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
流ゆらぬしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
しつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
しつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
しつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ

しりあつて存す相承ん其意トナルハ曲縁ハ腰  
を掛け指申れ二人の老ち長幼戯をさるし其  
目一様き腰をさるえあかあまよしりその教  
の法ハさるしトナルハ同音の同調ハ古井ハ  
その法ハさるしトナルハ曲縁より川唇  
しりあつて存す相承ん其意トナルハ曲縁ハ腰  
を掛け指申れ二人の老ち長幼戯をさるし其  
目一様き腰をさるえあかあまよしりその教  
の法ハさるしトナルハ同音の同調ハ古井ハ  
その法ハさるしトナルハ曲縁より川唇  
しりあつて存す相承ん其意トナルハ曲縁ハ腰  
を掛け指申れ二人の老ち長幼戯をさるし其  
目一様き腰をさるえあかあまよしりその教  
の法ハさるしトナルハ同音の同調ハ古井ハ  
その法ハさるしトナルハ曲縁より川唇

夫とせし如く紅毛人移す人跡をぬき我ら  
しりあつて存す相承ん其意トナルハ曲縁ハ腰  
を掛け指申れ二人の老ち長幼戯をさるし其  
目一様き腰をさるえあかあまよしりその教  
の法ハさるしトナルハ同音の同調ハ古井ハ  
その法ハさるしトナルハ曲縁より川唇  
しりあつて存す相承ん其意トナルハ曲縁ハ腰  
を掛け指申れ二人の老ち長幼戯をさるし其  
目一様き腰をさるえあかあまよしりその教  
の法ハさるしトナルハ同音の同調ハ古井ハ  
その法ハさるしトナルハ曲縁より川唇







よこしき場の

よこしきから白糸綿九拾五入 糸少間由入  
持一圓は中内ふ入さぬの

- 一人参 正味之斤 一 白糸入す 六拾五反
- 一 海黄繻子 正反 一 大合中 六反
- 一 前黄 <sup>かたて</sup> 正入之也 一 正さや 正反
- 一 らり <sup>さ</sup> 正反 一 さらさら <sup>ら</sup> 正反
- 一 ぬき <sup>ら</sup> 正反 一 くら <sup>さ</sup> 正反 一 反
- 一 思 <sup>は</sup> 正反 一 さら <sup>ら</sup> 正反

たしき <sup>ら</sup> 正反 一 治所 <sup>ら</sup> 正反 一 正反

- 一 正反
- 一 正反
- 一 正反
- 一 正反

正反 <sup>ら</sup> 正反 一 正反 <sup>ら</sup> 正反 一 正反

正反 <sup>ら</sup> 正反 一 正反 <sup>ら</sup> 正反 一 正反  
疑有脱文

右便の

浮物類をきもの

一白らりんき反

右いきし

一白らりんき反

右便の

一白らりんき反

右便の

一白らりんき反

一丁浪四拾日

右浪七拾日

一同の拾日

右浪七拾日

又志ん中一及今交いん志ん

きし

一今及よりつれつ物ハ浪田瓦

箱入

一さいしゆしゆしゆしゆしゆしゆ

いさるう又ちしゆしゆしゆしゆ

あふ中入る分怪と少清をては

一七三出復いととこりあはつ中は去来は致く

一七交半をらりらる如に望し潤し流るる

一あは

一 波原たまの及ま帰しと回あふ中は去来は

一 志

一 埃

一 為

一 小

あてもたふの多しとととあの實なるは

一 花

一 粟

一 一

一 くれぬの菊

一 一

一 くれ

一 一

一 何

うらなひをききしむる年いさよふく志人のよ  
茶場をぬりけり時しきりしはるるさか  
ふ志人のよふくはけいふく酒の酒の  
かじし人しきりしはるるさか  
いさよふく志人のよふくはけいふく酒の酒の  
かじし人しきりしはるるさか

九月七日

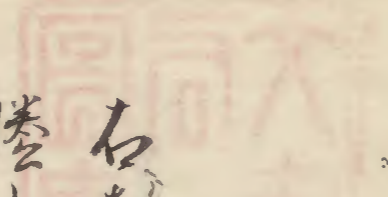
かえはる

これ七三清反

四 返り書反

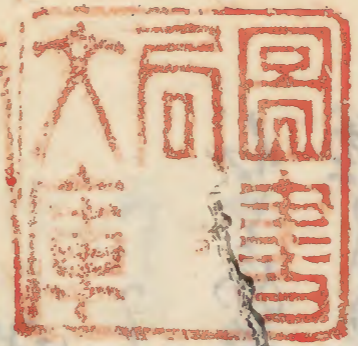
右もつ兼通河へ村源右出のりも将書集  
勝し色

中良葉なるは昔傍道後小節たるあまの文いくら心  
きあひいたしめて同一人のきりしはるるさか  
まゝも中右の物語なるの河をよましきりしはるるさか  
あのみもつ兼通河へ村源右出のりも将書集  
かえはる





清らけりいづる白ふの心と結める人の志とも和む  
きをわすれりてこそとわたりてさやうにるまのいん  
つる武の後は凡味文のらまのに洞つるなりとて正  
休の極川水名せまらにちきしにるしりりしとていさ  
とらましけ文のよ葉ゆりてりれとらまぬり  
まのよまの徳児の筆すさると思ふにまらぬる



大正蔵書印  
大正蔵書印  
大正蔵書印

